慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三田演説館の建築史を紐解く
Sub Title	Tracing the architectural history of "Mita Enzetsu kan"
Author	堀内, 正昭(Horiuchi, Masaaki)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2015
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.32, (2015.) ,p.267(30)- 296(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：演説館開館一四〇年 論説
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20150000-0267

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第三十二巻（二〇一五年）
特集　演説館開館一四〇年

論説

三田演説館の建築史を紐解く

堀　内　正　昭

はじめに

慶應義塾三田演説館（以後、演説館と略す）は、わが国に現存する明治初期における代表的な擬洋風建築のひとつである（図１、２、３）。

福沢諭吉の言葉を借りる。「特に演説の會堂を作ること必要なりと決して、直に新築に着手したり。此時余が手元には著譯書を發賣して聊か貯蓄もあり、新築の圖案は偶ま在米國富田鐵之助氏より寄贈せられたる諸種會堂の圖本を本にして之を取捨し、凡そ二千何百圓を費して匆々竣工したるものは慶應義塾の演説館にして、創立以来今日に至るまで學術演説の斷絶したることなし。」[1] ここで述べられているように、米国在住の富田鉄之助から会堂関係の図面を取り寄せたこと、建築費等のことはすでに演説館の由来に触れた文献で紹介されている[2]。

演説館は和瓦葺きで壁面を海鼠（なまこ）壁で覆っているが、玄関口を中心に置いた左右対称の構成、上げ下げ窓、軒蛇腹に見る段上に迫り出す形状等に西洋館の特徴を見ることができる。

昭和42（1967）年に国の重要文化財に指定され、その存在はよく知られているが、これまで建築史の分野でまとまって論じられたことはない[3]。

開館140周年の節目に執筆を依頼されたので、本稿では筆者の専門である建築史の立場から演説館を考察する機会としたい。

歴史的建築を扱う場合、当該建物の現状を知ることから始める。そして、関連資料、聞き取り、建物に残された痕跡などから創建時の姿を推察する。創建時の資料（図面、写真等）が存在する場合は、考察する上での実証性が増す。そうした作業により建物の歴史的変遷が明らかになり、創建時の建物の建築史上の位置づけや文化財としての価値を論じることができる。

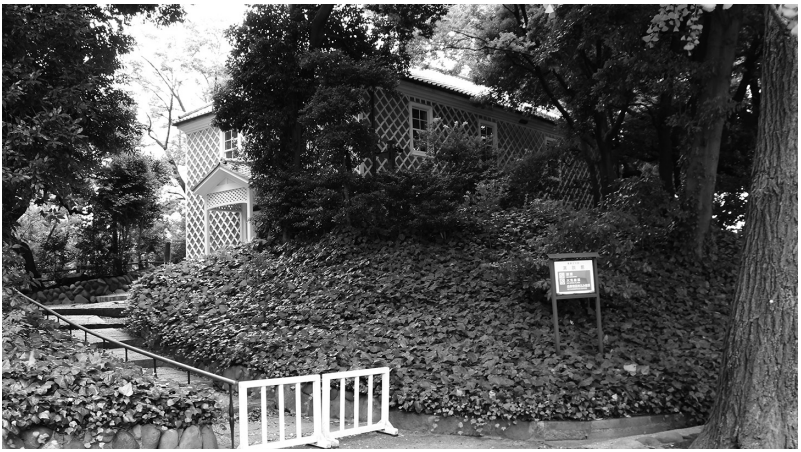


図１　構内の稲荷山に位置する三田演説館外観

以下は、演説館の沿革について修理工事歴を中心にまとめたものである[4]。

明治８（1875）年４月24日：竣工（開館式は同年５月１日）
大正４（1915）年：東京府史跡に
大正13（1924）年７月８日～９月30日：構内稲荷山へ移築工事、移築費は10,125円20銭。
昭和22（1947）年７月：修理工事
昭和35（1960）年３月31日：東京都文化財のうち都重宝（建造物）に
昭和42（1967）年６月：国の重要文化財に
昭和50（1975）年：改修工事
昭和57（1982）年：改修工事
平成７（1995）年12月～平成９年２月：保存修理工事
この間、平成８（1996）年：耐震補強工事
平成23（2011）年度：保存修理（災害復旧）工事
平成26（2014）年度：保存修理工事

以上の工事歴のうち、大正13年の移築工事は大きな意味をもつ。というのは、創建時の部材をどの程度用いて再建されたのかが問われるからであ

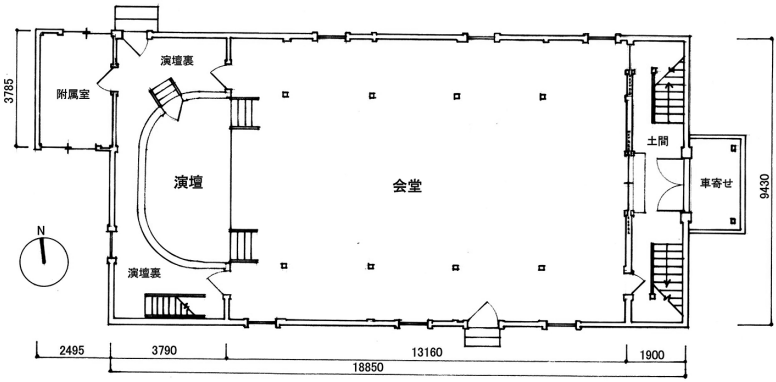


図２　１階現状平面図

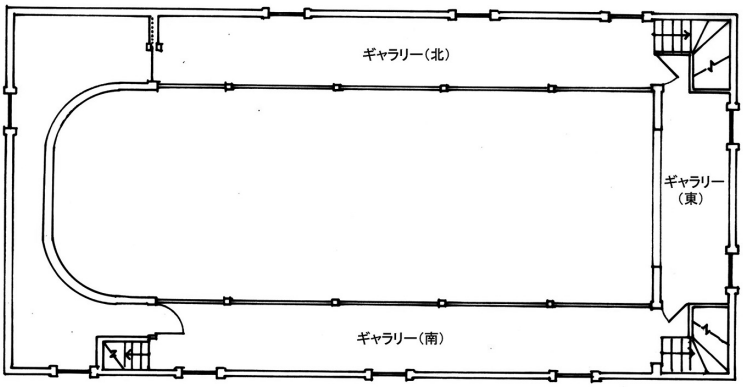


図３　２階現状平面図

る。もっとも、明治８年の竣工から移築時までに50年近く経過している。この間に改修工事がなされた可能性はあるが、その記録は見出せない。

演説館の価値や特徴を論じるには、移築ならびに改修工事による改変の有無を調べ、創建時の姿を正確に把握する必要がある。演説館については修理工事用に作成された現状図面と移築前の写真は存在するが、肝心の創建時のものはなかった。したがって、建具のような細部にまで至る当初の姿は不詳と言わざるを得ない。また、同図面に柱径や細かな部材寸法の記

入はなかった。

そこで、まずこの図面に部材寸法を書き込んでいくという実測調査を行い、演説館の現状把握から始めた。そして、同調査で得られた知見、慶應義塾福沢研究センターならびに同管財部より提供いただいた関連資料から、建物の改築の有無と程度を調べることとした。

このようにして、本稿では演説館の創建時の姿に出来うる限り迫り、明らかにできた範囲内で同建物のもつ特徴を考察する。

１．現在の演説館

演説館の現状を知るために、平成27（2015）年７月９日と同月16日に実測調査を行った。筆者以外の調査者は以下の通りである。

内田 敦子（昭和女子大学生活科学部環境デザイン学科・助教）
武藤 茉莉（昭和女子大学大学院生活機構学専攻３年）
金谷 匡高（法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻博士課程３年）

演説館は当初、図書館（旧館、明治45年築）の近くにあった。現在は構内の南に位置する稲荷山という丘にあり、同館へは稲荷山の北東ならびに北西から行き来できる２つの小路が付く。

演説館は寄棟造り桟瓦葺きで、東西に長い長方形平面をもつ。東側を正面とし車寄せを設ける。西側背面に附属室があり、それは切妻造り桟瓦葺きの平屋で、壁面を下見板張りとする（図４、５、６）。

車寄せは切妻造り桟瓦葺きで天井面を菱組みとし、同様の菱組みを各柱間上部に付けている（図７）。車寄せの支柱に几帳面取りがなされ、テラスは石の四半敷きである。

附属室の開口部が引違い窓である以外はすべて上げ下げ窓で、正面に２つ、北面に６つ、南面に７つ、そして西面に２つ設けられる。このほか出入り口は、正面玄関以外に北面と南面にそれぞれ１ヶ所ある。

玄関口は内開きの両開き戸で、その上に扁平アーチの欄間窓が付く。土間にコンクリートを打ち、中央正面にある沓脱石の右半分を３段の階段とし手摺を設ける。土間部分の天井は竿縁である。土間に水勾配（25㎜）が付くため、天井高さは3117㎜～3142㎜の高低差がある（図８）。

土間の両端に階段室を取り、やや急な曲がり階段が付く（蹴上220㎜、

図４　演説館南面

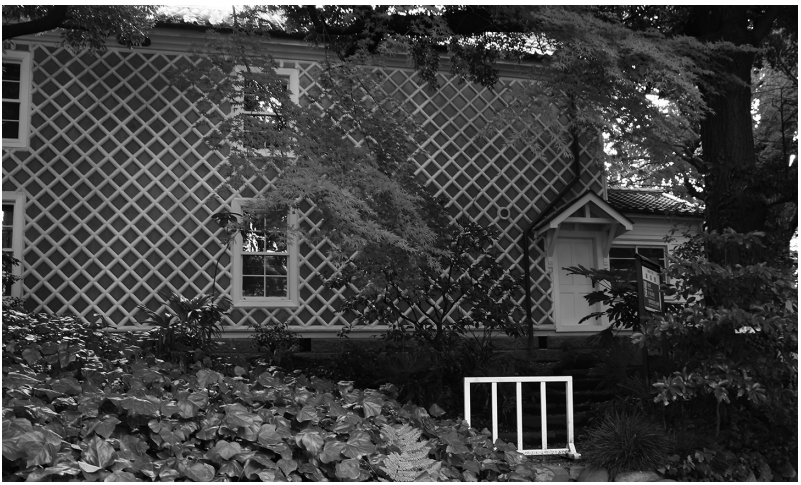


図５　演説館北面、右端に附属室

図６　演説館西面、左端に附属室

図７　演説館正面の車寄せ

踏面250㎜の計15段）。

土間から会堂への入り口は両引き戸（壁の内部に引分け）で、戸の上に玄関口と同型の欄間窓が付く。また土間の両端に出入り口があり、南側は開き戸、北側は引き込み戸である。演説館の規模は梁間9430㎜、桁行18850㎜で、不陸があるため天井高さは5652～5674㎜である。会堂の南北ならびに東にギャラリー（２階席）が巡り、会堂正面（西側）に半円形状の壁面を背にした演壇がある（図９、10）。

図８　玄関土間

ギャラリーは支柱と壁から渡された梁で支持される。ギャラリーの床下までの高さは2696～2707㎜、奥行は２階の内法で1710～1716㎜、手摺の高さは670㎜である。ギャラリーを支える梁断面は293（成）×130～295×138㎜で、支柱には面づら幅18～20㎜の面取りがなされる。これらの支柱は同じ位置で天井まで立ち上がるが通し柱ではない。次表に、支柱の大きさを示す（単位㎜）。

１階	南側（玄関側から）	125×125	120×130	125×125	125×120
	北側(同上)	120×126	123×123	120×125	121×121
２階	南側（同上）	126×127	127×130	133×125	127×130
	北側（同上）	128×128	130×125	130×124	135×131

このように、１階より２階の柱の方が太い。

なお、各支柱の柱間は心々で以下の通りであり、最大29㎜のばらつきがある（１階のみを示す。単位は㎜）。

１階	南側（玄関側から）	2798	2816	2810	2823	1851
	北側（同上）	2815	2815	2822	2799	1880

１階と２階の柱の太さの違いは、それぞれの柱の高さが異なることによる。参考までに現行の建築基準法を演説館に当てはめて、横架材間の垂直

図９　会堂内の演壇側（西）を見る

図10　会堂内の玄関側（東）を見る

距離に対して必要な柱の太さを求めてみる[5]。現状断面図から、演説館の１階（ギャラリーを支持する梁の下端まで）の横架材間の垂直距離は約2550㎜、２階のそれは約3150㎜である。これらの距離に１階1／22以上、２階1／25以上という定められた割合を掛けると、１階の柱径は116㎜以上、２階は126㎜以上が必要となる。

実測した結果では、１、２階の柱とも必要な柱径をもっていたことがわかる。

会堂の南側と北側に設けられた上げ下げ窓は、南北方向で同じ箇所にはなく、ずれている。また、１階と２階の上げ下げ窓の大きさに違いがある。窓の横幅を外枠の内法で測ると、１階が910～916㎜、２階が906～910㎜で、これは誤差の範囲内といえる。それに対して、窓の縦方向は１階が1743～1747㎜、２階が1505～1523㎜で、明らかに１階の窓の方が縦長である。さらに、これら上げ下げ窓の配列は一定ではなく、以下のように窓同士の間隔は異なっている（単位は㎜）。

１階	南側（会堂内、玄関側から）	1484	3617	3755	505
	北側（同上）	300	2764	3701	2573

演壇は会堂の床から615㎜上り、演壇の横幅（内法）は5465㎜、中央の奥行は2810㎜で、演壇向かって右手（北側）に開き戸がある。演壇裏は会堂と同じ梁間をもち、奥行は両端の内法で3560㎜であるが、演壇中央の裏では747㎜と狭くなる。

この演壇裏に附属室がある。大きさは内法で3583×2263㎜（心々で3785×2495㎜）、南北面に引違い窓がつき、天井高さは2321㎜である。演壇上の開き戸近くに附属室があることから、同所は演説者の控室であったのだろう。なお、演壇裏の南側に直階段が付く。

正面側の曲がり階段から２階に行くと、南北両ギャラリーと東側ギャラリーとの間には開き戸があるが、それぞれの戸の付く場所は異なっている。他方、南北両ギャラリーから２階演壇裏への開口部は、南側が開き戸で、北側が引き込み戸となっている。つまり、建物の東西軸に対して、戸口の位置ならびに開閉の仕方は左右対称ではない。

天井は和紙張りで、黒で縁取られた四分一（しぶいち）（入隅に取付ける細長い部材）を打っている。この和紙張りは、玄関土間部分ならびに演壇裏の北側の一部を除き、２階ギャラリーと附属室のすべての天井に使われている。なお、

会堂の天井には２箇所に丸穴があり、そこから照明器具が下りている。

小屋組は和小屋で、屋根勾配は10分の６である。２階演壇裏の天井に設けられたハッチから入り、演壇寄りの小屋組を実測した（単位は㎜）。

陸梁（成230×210～240×220）の中央で桁行方向に梁（成205×185）を組む。以下、諸部材の寸法を記す。

真束（135×138）、小屋束（108×113、110×111、115×120、110×113）、棟木（成130×135）、母屋（成145×138、130×131、130×132、140×120）、軒桁（成150×125）、垂木（成65×75：垂木間隔は465）、貫（成113×25、110×20）。

建築面積は、当時の記載によれば「坪数五十七坪余」[6]という。これを現行と比較すると、建築面積は車寄せを含めた場合に191.8㎡（58.0坪）となる。

ところで、当時の建物は尺寸で設計され、演説館は「間口五間入り十間」[7]であったという。現在の演説館の間口は9430㎜なので、1間当たりは1886㎜（１尺は約314㎜）となる。１間1818㎜の標準値からすると、演説館の１間の取り方は長い。

２．創建時から移築前までの演説館

創建時の姿を髣髴させる資料はわずかである。関係資料を順に紹介する。

『慶應義塾五十年史』に掲載された配置図に演説館があり（図11）、「エンゼツカン」と書かれている。

同配置図は「明治五六年頃に於ける、義塾全図」[8]と紹介され、図面には「明治初年」の書き込みがある。しかし、演説館は明治８（1875）年４月に竣工している。さらに、同配置図には演説館の隣に万来舎があり、こちらは明治９年11月に集会所として建てられた[9]。したがって、同配置図は明治５、６年というのは誤りで、明治９年頃となる。

同図の演説館は東西方向に長い長方形で、背面に附属室が付いている。年代に疑問があり、略図ではあるが、創建時の姿を知る上で最初のものと考えてよいであろう。

次に、『慶應義塾創立150年記念 未来をひらく福沢諭吉展』に、「慶應義塾全図」が掲載されている[10]。同図には「此図ハ明治八九年ノ状態ニシテ」という但し書きがあり、演説館には「此西洋造リ演説場」と記されている（図12）。

この全図と酷似するのが「東京三田慶應義塾邸内之縮図 凡六百分ノ一」で、「明治九年第十二月図之」との記載がある[11]。ここでは、同図にしたがって演説館ならびに周辺の建物を紹介する（図13）。

図面右下（東）に三田通りに面して旧島津藩の黒門があり、黒門を抜けて左手の上り坂を行くと小幡篤次郎邸が見える。同邸を左に見ながらさらに坂を登ると、演説館に至る。演説館の近隣に医学校がある。構内に柵が巡り、演説館（図中では「演舌所」と表記）は構内の北東の端に位置する。なお、同図では明治９年11月に完成していた万来舎は未記載である。

『慶應義塾五十年史』に戻ると、同書に「明治二十年頃ノ図面」が見出せる[12]。演説館（図中のニ）の左手（南）にあるのは「煉瓦講堂」（図中のへ）で、明治20（1887）年に建てられている（図14）。

同書巻末に「慶應義塾全図」が付く。同全図の年代は未記載であるが、同書の刊行は明治40（1907）年４月であり、全建築物の一覧が掲載されている。その建築年のなかで最も新しいのは明治39年なので、同配置図は刊行直前のものと考えてよい（図15）。

さらに、『慶応義塾百年史　中巻（前）』に、大正６（1917）年３月と記載された「三田構内建物配置図」がある[13](図16)。

これらが、配置図から追跡できる創建時から移築前の演説館の姿である。次に、配置図からわかる建物の特徴について述べる。

・「明治初年」（図11）、演説館の背面（西側）に現在と同じく張り出した附属室がある。
・「明治八九年頃」（図12）、演説館は長方形で示されるだけで附属室はない。
・「明治九年十二月」（図13）、唯一間取りが分かる図であり、正面玄関土間の両端に曲がり階段が描かれている。西側に半円形状の演壇、その左（南）に直階段が書き込まれ、正面以外に建物南面の西端に出入り口と思われる張り出しがある。
・「明治二十年頃」（図14）、附属室のほか、演説館南面の講堂に面した方に出入り口と思われる張り出しがある。
・「明治40年頃」（図15）、演説館南面の出入り口は「本館」と繋がっているほか、その連結部の後方（西）にさらに細長い建物（屋根付きの歩廊かもしれない）があり「大学部」と繋がっている。附属室にさらに小さな張り出しがある。

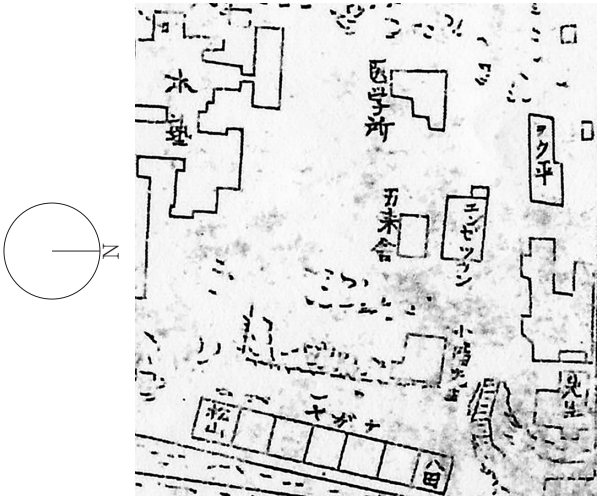


図11　演説館の配置図（エンゼツカンと記載）

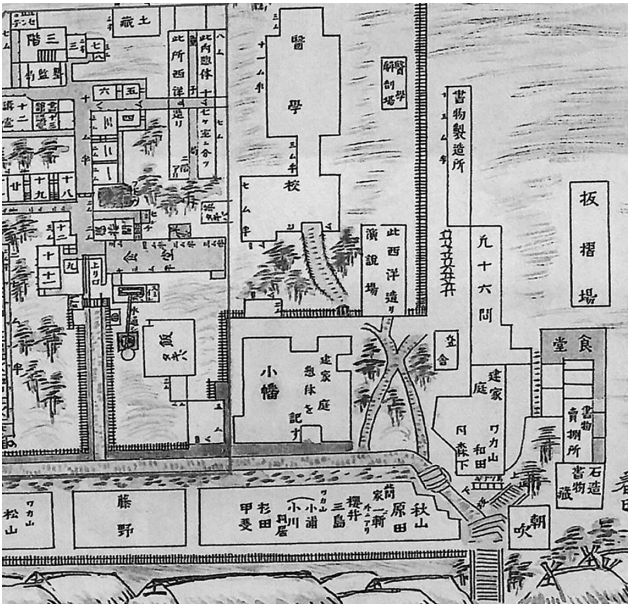


図12　演説館の配置図（演説場と記載）

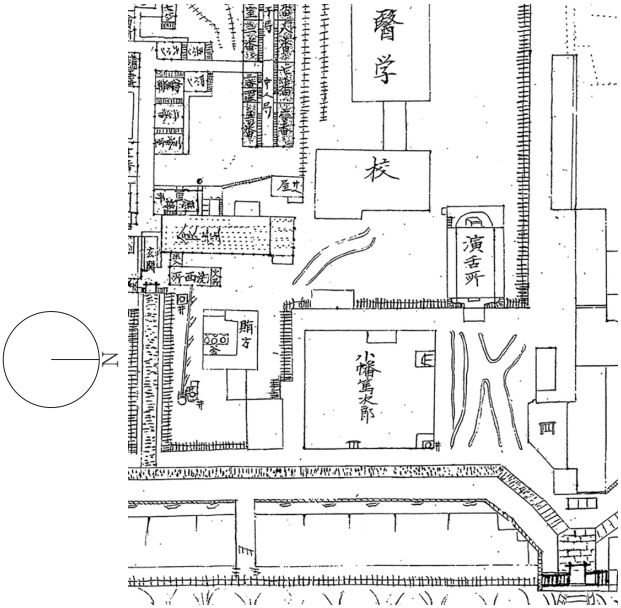


図13　演説館の配置図（演舌所と記載）

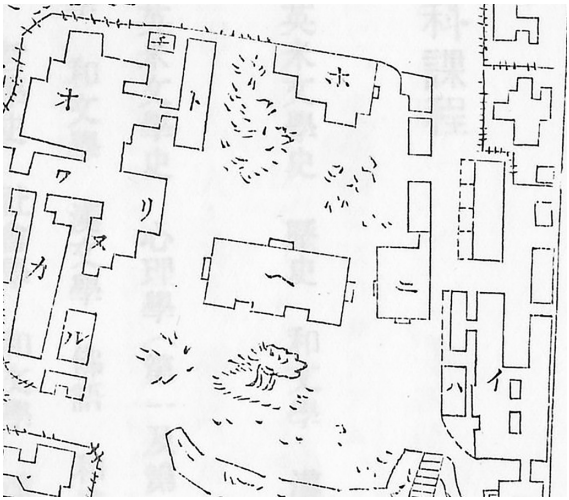


図14　演説館の配置図（図中のニ）

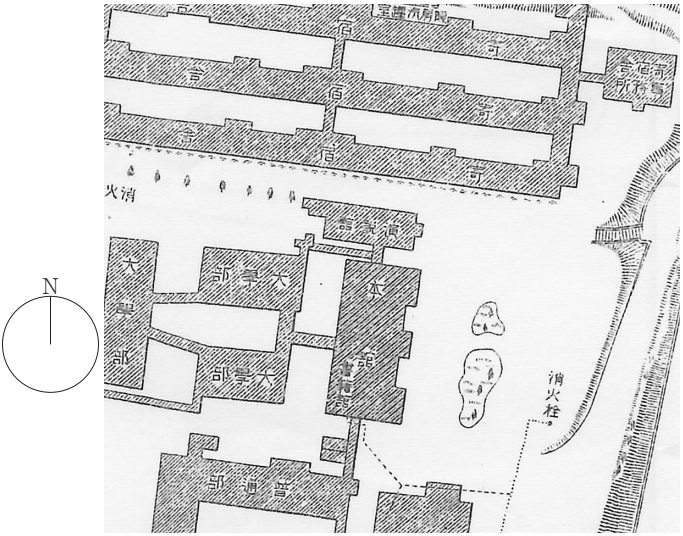


図15　演説館の配置図

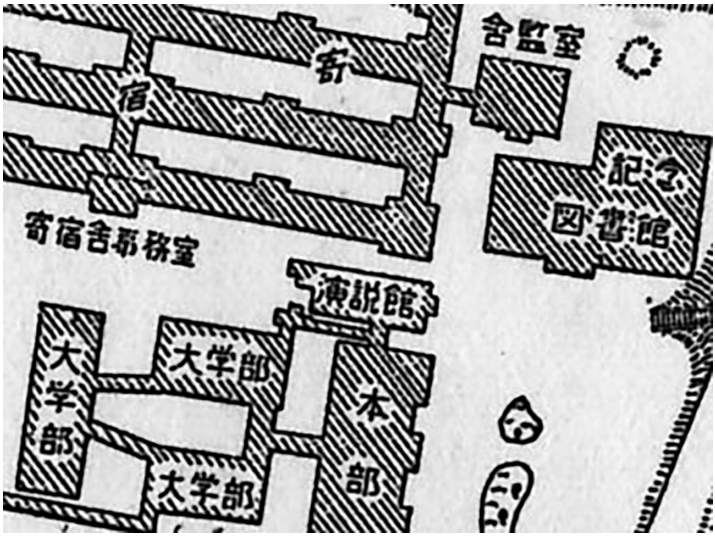


図16　演説館の配置図

なお、大正時代の演説館（図16）は明治40年頃のもの（図15）と同形である。

正面以外の出入り口については、明治９年以降の図面ではすべて建物の南面にあった。ただ、その箇所は南面の西端にあったり、東寄りにあったりと場所を変えている。

図13の張り出しが出入り口とすれば、演壇南側の直階段近くにあったこと、そして明治20（1887）年頃以降の張り出しは、講堂との連絡通路としての役割があったことになる。

次に、写真から移築前の姿を探ってみる。

３．移築前の写真資料

ここに３枚の写真を紹介する。

図17は右に図書館、左に講堂が写っていることから、図書館が建てられた明治45（1912）年以後、講堂が関東大震災で被災し取り壊された大正13（1924）年までとなる。図18は講堂のほかに右側に寄宿舎が写っている。寄宿舎は明治33（1900）年に建てられたが、図15と図16に描かれた寄宿舎は規模が異なる。このうち図18の写真は図16の配置と一致するので、撮影年は明治45年以後と考えられる。図19は、講堂が取り壊された大正13（1924）年３月頃から演説館が移築された同年７月以前のものとなる。

図17には、演説館の背後に附属室が写っている。子細に見ると、附属室は平屋の桟瓦葺きで、外壁は押縁下見であったことがわかる（図20）。ただし、この押縁下見仕上げは創建時からそのままであったのかは不明である。

図17と図19から、出入り口については、移築前には建物の北面にはないこと、南面には２ヶ所あったことがわかる。また、図18から、演説館南面の東寄りの出入り口は創建時からあった可能性はあるが、必然性からすれば、講堂が建てられた明治20年以後の連絡用と考えられ、それは屋根付きの歩廊であったことがわかる。

さらに図17を参考に、屋根ならびに海鼠壁を現在のものと比較してみる。まず、屋根瓦については、同型かどうかは判別できないが、隅棟と大棟の丸瓦は、写真では起伏のない瓦であるのに対して、現在のそれは凹凸のある紐丸瓦を使っている。また、同図には車寄せの屋根の先端に下り棟がある。

図17　移築前の演説館外観

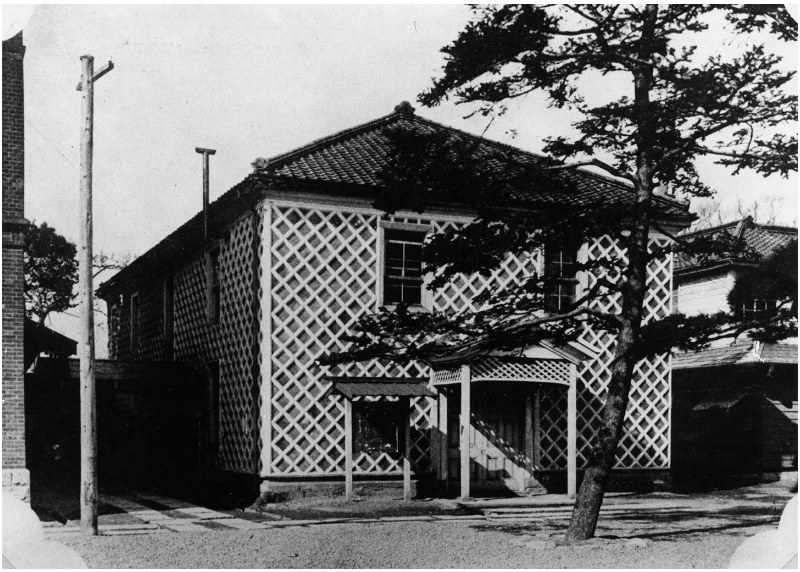


図18　移築前の演説館外観

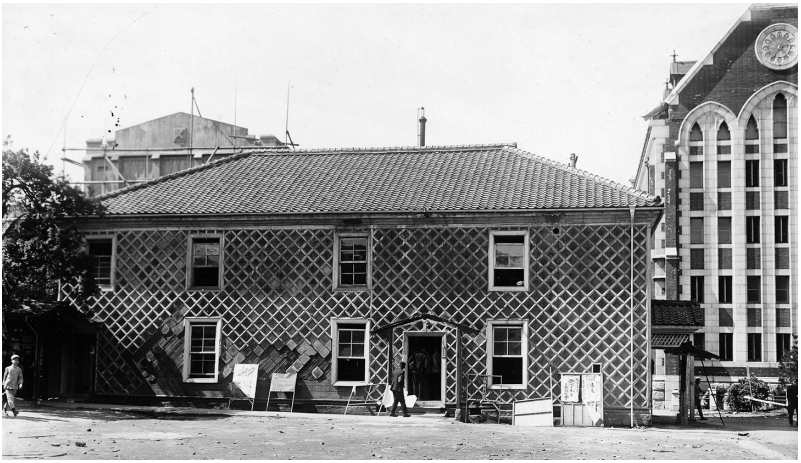


図19　移築前の演説館外観（関東大震災後）

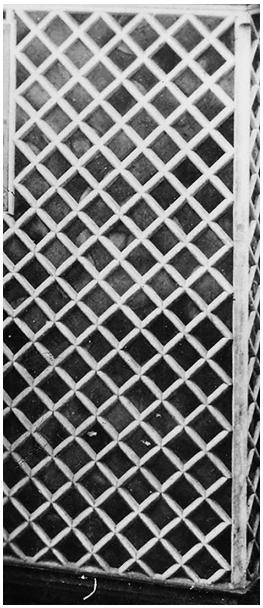
海鼠壁については、東側正面の平瓦の枚数を比べると、移築前では縦に平瓦が12枚と半枚数えられるのに対して（図21）、現在の海鼠壁では縦に12枚と3/4枚となる（図22）。ただし、現在の両側面の平瓦は移築前と同じく12枚と半枚である。

なお、現在の車寄せの敷石は四半敷きであるが、移築前は中央に矩形の大きい石を、支柱周辺に小さな石を敷き並べていたことがわかる。

以上から、移築前の外観の姿を捉えることができるとともに、移築後との相違点は以下のようになる。

・附属室の仕様は押縁下見から下見板に変更された。
・演説館南面の２ヶ所の出入り口のうち、西端のものは閉じられた。
・同北面に出入り口が新設された。

図20　演説館附属室の外観（図17を拡大）



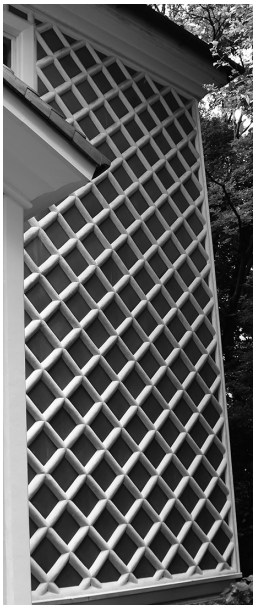


図21　移築前の演説館の海鼠壁（正面側）（図17を拡大）　図22　現在の演説館の海鼠壁（正面側）

・海鼠壁の瓦の割り付け（目地割り）は変えられた。
・車寄せの石張りは、四半敷きに変更された。
・車寄せの屋根先端の下り棟は、現在の屋根にはない。

４．移築前の会堂内

次に移築前の会堂内について考察する。

この室内写真は（図23）、左手の上げ下げ窓越しに隣接する建物が写っていることから、移築前のものである。講堂と思われるので、明治20（1887）年以後のものとなる。

明治８（1875）年の演説館開館時、小幡篤次郎は祝詞の中で会堂について次のように述べている。

「其内に入れば中央快豁、前面に半圓形の高坐を設け講師演習の場と爲し、下段に七人を坐すべき長椅子を二行十五列に置て社員の居所となす。」[14]

同写真にはすでに創建時の長椅子はなく、1人掛け椅子に代わるだけの月日が経過している。また、演壇上の開き戸の板は割れているし、演壇脇右手（北側）の開き戸とその框には隙間が出来ている（図24）。これらは、演説館に長期間改修の手が入っていないことを伺わせる。

以下、気付いた点を列挙する。

・天井は文様入りの紙張りで、入隅に四分一を打っている。
・天井の２ヶ所の丸穴は換気口で、照明器具を別に吊り下げている。
・室内の支柱は、面取柱である。

さらに、子細に写真を調べると、以下の諸点が指摘できる。

・演壇上の右寄りにある開き戸のノブは戸の右にあるが、現在のそれは逆に左にある。
・演壇両側の開き戸のうち、演壇向かって右手の戸のノブは現在と同じく右にあるが、左手の戸のノブは左にあり、現在とは反対である。つまり、移築前の演壇両側にある開き戸は、建物の東西軸に対して左右対称の開き方になっていたのである。
・演壇側２階の開口部のうち、向かって右手の現在の引き込み戸は、写真からでは現在と同様に見えるが、開き戸であったのかもしれない。他方、演壇２階の左手には明らかに開き戸が２ヶ所にあり、さらにその右側の戸には蝶番らしきものが右上に見えるので、開閉方向は現在の戸とは逆である（図25）。

５．修理工事について

沿革史で述べたように、演説館は、移築後、記録に残っている改修工事を少なくとも６回行っている。順にその内容について触れる。

昭和22（1947）年の改修工事については、『慶応義塾百年史』に、「なんといっても年を経た建物であり、戦時中の朽廃汚損もはげしかったので、義塾創立九十年にあたり、幼稚舎四四会（明治四十四年の幼稚舎出身者の会）の寄付によって、昭和二十二年（一九四七）七月、安藤組の施工で補修工事をほどこし」[15]という記載がある。また、「三田演説館修復披露記念講演会速記録」には、同改修工事前の演説館の有様が次のように記されている。「（会堂）周囲の手摺は全部打ち壊され、天井は剥げ、壁は落ち（略）実に惨憺たる荒廃ぶりを呈しておった（略）三月の十五、六日であったと思います、安藤組の方々にご相談して、ただちに修復に取かかったのであ

図23　移築前の会堂内

図24　移築前の会堂内（左：演壇上の開き戸、右：演壇脇の開き戸）（図23を拡大）

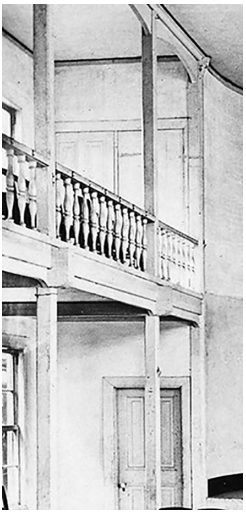


図25　移築前の会堂内（演壇側2階左に2枚の開き戸）（図23を拡大）

ります（略）幸い九十年祭式典開始直前にこの修復ができ上がったのであります。」[16]

このように、昭和22（1947）年の工事は３月中旬以後に着手され、ギャラリーの手摺の更新、紙張り天井のほか漆喰壁の改修がなされた。このとき演説館は相当に荒れ果てていたことから、建具を変更した可能性が考えられる。

昭和50（1975）年の工事はこのギャラリーの手摺を再度改修するもので、慶應義塾に以下の工事履歴が残されている[17]。「演説館の２階手摺は終戦直後に旧型の手摺が進駐軍により破損された為、現在の手摺が設置されておりますが、本年、会館100年記念に際して手摺の笠木と手摺子を戦前の写真に基き旧型に復元する。」また、同年に会堂内の塗装が行われ、「壁部分（塗装面積635㎡）、建具および木部（塗装面積340㎡）」という記録がある。

昭和57（1982）年の工事については、文化庁側に「棟飾り、樋、内壁、階段室補修」という改修届の記録が残されている[18]。

平成７（1995）年12月～平成９年２月の保存修理工事については、「保存修理工事清算書」が残っている[19]。以下、その修理方針をそのまま引用する。

> 基礎：北西面の基礎石積が一部沈下していたので、部分的に解体して積直し、附属屋についてはすべて解体し、積み直した。両側面の石階段を積直した。
> 軸部：腐朽している東南隅及び北西隅の柱・間柱・土台を一部解体して取替・補修を行った。会堂・床組不陸部、外部木摺壁等破損または腐朽部を解体して補修した。背面附属室は破損が著しかったので、いったん木部を解体して補修のうえ、組直した。
> 屋根：屋根桟瓦葺は野地補修のうえ土居葺を行い、全面葺直しを行った。瓦は再利用し、破損材のみ取替えた。
> 壁：外部ナマコ壁は破損瓦を取替え、すべて張直した。内部の漆喰塗壁は下地より剥離がみられた部分は塗り替えを行い、良好な部分は中塗より塗直した。
> 造作・その他：内外部の塗装の塗替えを行った。但し、内部の比較的良好な塗装は上塗直しとした。内部天井和紙貼りの貼替えを行った

（現状型押し和紙）。周囲の雨樋を取替えた（銅製）。

このように、同工事は大掛かりな修理であった。

同工事期間の平成８（1996）年に、耐震補強工事がなされている。関係図面から[20]、会堂内の東面ならびに西面に構造用合板を貼るほかに、軸組と木摺の各所に金物の補強等がなされたことがわかる。

なお、同工事中に、２階ギャラリーに床置型の空調機左右４台の計８台が設置された[21]。

平成23（2011）年は、東日本大震災（同年３月11日）の被害の補修であり、関係図面には以下の注記がなされている[22]。

・車寄を全解体し、軸部の矯正を行い組み立てる。
・屋根土居葺きはすべてやり直し、桟瓦・熨斗瓦・鬼瓦はすべて再用するが、割れているもの、凍害などを起こしているものがあれば取り替え、葺き直し、棟の積み直しを行う。
・車寄取り合い部のなまこ壁は下地から塗りなおす。
・窓枠周囲のなまこ壁、なまこの剥落・剥離・亀裂等の破損部分南側8箇所、東側２箇所を補修
・（会堂内）漆喰壁亀裂補修

平成26（2014）年には、関係図面から[23]「会堂内外の塗装、窓廻なまこ壁補修、窓廻外部塗装、床束40箇所の修正（腐朽部取替、不陸調整）」がなされていたことがわかる。

ただし、これらの改修工事の記録からは建具の変更といった詳細まではわからない。

６．紙張り天井について

演説館の紙張り天井は、同館のもつ特徴の一つである。事例には、現存最古の洋館として知られる旧グラバー邸（文久３年、長崎市）、旧オルト邸（慶応元年、長崎市）、旧リンガー邸（明治元年頃、長崎市）などがあり、演説館と同時代の現存例に、旧中込学校（明治８年、佐久市）、旧開智学校（明治９年、松本市）などがある。

紙張り天井については、次のような見解がある。

「大工棟梁が目にした紙張り天井は洋風の建物のものと映り、洋風建築を建てる際には、上等の部屋に紙張り天井を用いた。この壁張り天井は、

張付壁の仕様と同様に四分一を打って仕上げられた（中略）見方を変えると、板張りや紙張りの天井は、漆喰塗りの天井と違って乾式であるので、職人を動員すれば工期を短くできるという利点があり、紙張りは板張りより室内が明るくみえるという利点もある。」[24]

演説館の紙張り天井については、平成７年からの改修工事の際に次のような修理を行っている[25]。

「昭和59年の修理の際にもとの天井和紙張りの上にベニヤ板を張り付け、現状の和紙張りが施されていた。今回の修理ではもとの天井和紙張りはこのまま残すこととし、現状の和紙張りをすべて貼り替えた。」

実際の施工では、「べた貼り、袋貼り、上貼り」の３回の工程で仕上げている。

７．創建時・移築前・移築後の演説館

これまで検討してきた資料の中では、演説館の創建時の姿をよく伝えているのが、明治９（1876）年12月の配置図（図13）であった。

当初の演説館は、構内の北東隅に位置していた。その場所は、演説会を催すのに三田通りから行き来しやすい場所にあったことがわかる。また、演説館の北面に出入り口がなかったのは、建物の北側が柵で閉じられていたからである。

演説館正面側の柵は、建物東面の両端から始まっている。同図が当時の様子を正確に伝えているとすれば、建物は構内にあるが、車寄せは構外に張り出して外部から直接出入りできたことになる。

次に、建物の南面西端の出入り口について改めて考えてみる。図13から、演説館正面側に柵があるため、演説館から構内の別の建物と行き来する場合に、一度構外に出なければならない。それゆえ、創建時の建物南面に出入り口があった方が便利である。ただし、その際に戸の開閉時に出る音や外気の侵入を考慮すると、出入り口は会堂内ではなく演壇裏にあった方がよい。このことから、創建時から建物の南面西端に出入り口があり、明治20（1887）年に講堂が建てられたとき、講堂と演説館の間に連絡用の通路が新たに出来たと考えられる。

なお、附属室は時代によっては描かれていないが、配置図そのものが簡略されたものなので、省かれたのであろう。配置図の中にはじめて現れた演説館に附属室があることから、創建時から付いていたと考えられる。

大正13（1924）年の移築工事後は、移築前の写真等から、いくつかの箇所で改変がなされたことがわかった。昭和42（1967）年６月に国の重要文化財となった後の記録に残る改修工事は保全を前提にしているので、改変があったとすれば、移築時と昭和22（1947）年の改修工事のときとなる。海鼠壁の瓦の枚数が異なることは、平成７（1995）年からの改修工事で指摘されていた[26]。同工事では移築前の目地割りに戻すことはしていないので、復原よりも現状の保全を優先したことになる。

稲荷山への移築に際して、演説館は創建時とほぼ方位を同じくして再建された。しかし、稲荷山の南方には構内の柵が迫っているため、建物の南面は出入り口には適さなくなった。そこで、移築前に南面にあった２ヶ所の出入り口のうち西端のものは閉じられ、演説館北面の西端に出入り口が新設された。

８．建具ならびに階段室について

移築前の会堂内の写真から、１階演壇の両側にある開き戸は、開き方が左右対称であったことを指摘した。もっとも、会堂両側面の上げ下げ窓の位置が南北で一致していない。さらに演壇裏においては、南側にのみ階段があり、附属室が背面北側にあるため、そもそも左右対称を取りにくい。演壇裏の上げ下げ窓は、南側の２階にひとつ、西側の１階にひとつ、同２階の北寄りにひとつあり、会堂の窓とは異なって上下階の同じ位置に配されていない。したがって、開口部を左右対称に設ける意図は一貫していなかったことになる。

以下、建具について気付いたことを列挙する。

・土間両側の２つの出入り口（開き戸と引き込み戸）のうち、開き戸の方は階段の側桁に当たって90度開かない（図26）。

・２階の南側ギャラリー東端の開口部の両框には金具が残され（図27）、その形状からカーテンを吊っていたと考えられるが、開口部にカーテンを用いていたのはここだけである。

部材が元のままであれば、改変に際して何らかの痕跡が残っているはずだが、建具周りの框には蝶番をはじめとした痕跡は見られなかった。そのため、現状からは創建時の建具の納まりと開閉方向については判明しない。

・演壇裏にある直階段の２階は壁で囲まれ、その壁が階段室の方に張り出している。そのため、階段室の幅が狭くなり（階段の両側桁まで635㎜、

図26　土間左手（南）の開き戸（開く途中で階段側桁に当たる）

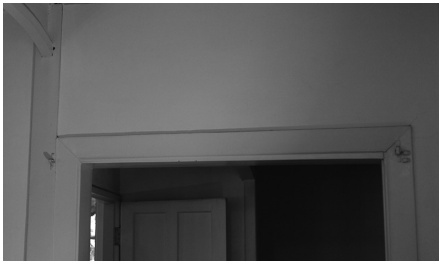


図27　南側ギャラリーの東端開口部に残る金具

図28　演壇裏南側にある階段室

図29　東側ギャラリー北端の開き戸（開く途中で壁に当たる）

図30　東側ギャラリー南端の天井の縁取り

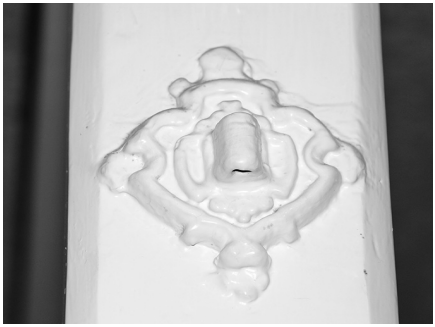


図31　会堂内支柱に残る金具

図32　移築前の会堂内支柱に残る金具（図23を拡大）

壁の内法で697㎜)、不自然な造作に思える（図28)。
・東側ギャラリー北側の開き戸は階段室の壁に当たって90度開かない（図29)。
・同ギャラリーの南側階段室は手前にわずかに張り出し、天井面の縁取り(四分一）もその分食い違う（図30)。

なお、会堂内の支柱には途中に花柄模様をもつ金具が計５箇所付いている（図31)（縦125㎜×横105㎜)。このブラケットの受け金具のような装飾は、演壇寄りの南北の支柱にそれぞれ２つ、東側ギャラリーの上げ下げ窓に１つの計５個ある。それは、移築前の会堂内写真でも確認できるが（図32)、ブラケットはなくその用途は不明である。

おわりに

三田演説館の創建当初の姿は、配置図に描かれた建物の輪郭と簡単な間取りで知ることが出来る程度であった。それらは略図であったが、現在の演説館と基本的には違わなかったことを教えてくれる。

移築前の演説館内外の写真のうち、外観の撮影年は明治末以後、会堂内のそれはもう少し遡れる可能性はある。とくに会堂内写真の建具には傷みや狂いが見られ、長らく改修工事がなされていなかったと判断できるので、創建時の姿をよく留めているように思われる。

数多くの擬洋風建築に用いられた和紙張り天井には、「工期を短くでき、室内が明るくみえる」という効果があった。演説館にとってそれは利点となる。

創建時の演説館は、三田通りに近い慶應義塾構内の北東隅にあった。そこは外部から往来しやすい場所であるとともに、他の校舎への行き来のために演説館南面に出入り口を必要とした。こうした場所に由来する移築前の使われ方は、移築後、逆に建物の北面が担うこととなった。

国の重要文化財に指定された昭和42（1967）年以後の修理工事は、保全のための改修や耐震補強を目的としていた。したがって、大正13（1924）年の移築時に（昭和22年の改修時の可能性もある)、出入り口をはじめ様々な変更がなされ、それらが結果として引き込み戸と開き戸の混在、一部開き戸が十分に開らかない状況に至らせたと考えられる。

移築前の写真と現行を比較すれば、少なくとも１階の演壇左（南側）の開き戸、演壇上の開き戸、そして演壇側の２階左手の開き戸は、戸の開閉

方向が移築前とは逆になっている。これらの箇所の框には蝶番を入れ替えた痕跡はないため、戸とともに框を入れ替えたことになる。

演説館に限らず、歴史的建築に改変は付き物である。言い換えれば、歴史的建築は改修工事の積み重ねで維持される。それは長期間にわたって現役で使用され続けてきたことの証しである。

西洋館はシンメトリーの構成を取ることが多い。演説館の正面は、車寄せを中央に置いた完全なシンメトリーで構成されている。また会堂は「間口五間入り十間」で、梁間と桁行は１対２の単純な比例で設計されている。

会堂内の写真で考察したように、１階の演壇両側のそれぞれの開き戸の開閉を見れば、演説館の設計者は左右対称を意図していたことがわかる。本稿で収集できた資料からは、当初の建具のひとつひとつまで詳らかに出来なかったが、創建時の建具の納まりと設置場所は、建物の東西中心軸に対してシンメトリーを意識して取り付けられていた可能性がある。

ただ、もっとも目立つ建物側面の上げ下げ窓の配列に、設計者の想いが反映されていると考えられる。彼はシンメトリーを意識しながら、窓については互い違いの配列を重視したということになる。それは何故なのか。

今も残る会堂南面の出入り口は明治20（1887）年頃の改築と考えられるが、仮に創建時から同じ位置に出入り口があったとすれば、南北面で窓が揃わない理由になるかもしれない。しかし、南面の窓の位置に北面のそれを合せることが出来るので、出入り口の有無は決定的な要因とはならない。

このことから、窓の配列は採光を優先した結果ではないだろうか。南面は北面より圧倒的に採光に適している。そのため南面の窓は演壇寄りとし、さらに窓の食い違いにより会堂内により万遍なく光が届くと考えたのではないか。今のところ推測の域を出ない。

これを機に、三田演説館の関係資料が発見されないとも限らない。未解明なところは今後の課題としたい。

註

1　『福澤諭吉全集　第１巻』、昭和44年、初版昭和33年、岩波書店、p. 59　なお、「福沢諭吉」と「慶應義塾」については、参照元の文献（資料）の表記に倣い、それ以外の文中では括弧内の表記とした。

2　例えば、『慶応義塾百年史 上巻』、昭和33年、慶応義塾、p. 648

3　田邊健雄、杉田謙：「三田演説館と明治会堂について　我国における公会堂

建築の先駆として」、1989年度日本建築学会関東支部研究報告集、pp. 265-268
同研究は演説館自体の建築史を扱うものではない。また同稿には、演説館の平面図と断面図が掲載されている。移築後の図面と考えられるが、現在慶應義塾には見当たらない。

4　参照。『慶応義塾百年史 中巻（後）』、昭和39年、慶応義塾、pp. 181-184　大澤輝嘉、「慶應義塾史跡めぐり 第二回 三田演説館と稲荷山」、『三田評論』（1090）、2006年、慶応義塾、pp. 60-63　慶應義塾管財部所有の三田演説館改修工事関連図書（詳細は後述）その他、文化庁文化財部と公益財団法人文化財建造物保存技術協会からの聞き取りによる。

5　建築基準法施行令　第43条（柱の小径）による。なお、断面図は、平成７年から９年に行われた「重要文化財 慶応義塾三田演説館 保存修理」（財団法人文化財建造物保存技術協会）の図面から、横架材間の垂直距離の寸法を取った。柱径を求める割合は「壁の重量が特に大きい建築物」の基準を応用した。

6　石河幹明、『福澤諭吉傳 第二巻』、1932年、岩波書店、p. 239

7　前掲書、p.242

8　『慶應義塾五十年史』、明治40年、慶應義塾、p. 128　配置図は p. 129に掲載。

9　参照、『福澤諭吉傳 第二巻』（前掲書）、p. 257

10　慶應義塾、東京国立博物館、福岡市美術館、大阪市立美術館、産経新聞社編、『慶應義塾創立150年記念 未来をひらく福澤諭吉展』、2009年、慶應義塾

11　慶應義塾福沢研究センター所蔵。同図の存在は慶應義塾福沢研究センター准教授 都倉武之氏のご教示による。

12　『慶應義塾五十年史』（前掲書）、p. 165

13　『慶応義塾百年史 中巻（前）』、昭和35年、慶応義塾、p. 776

14　『福澤諭吉傳 第二巻』（前掲書）、p. 242

15　『慶応義塾百年史中巻（後）』（前掲書）、p.182

16　「三田演説館修復披露記念講演会速記録」、三田演説館にて昭和22年７月19日に行われた講演会記録で、福沢研究センターからのご提供による。

17　慶應義塾管財部石井政彦氏のご教示による。同管財部に、昭和50年に行われたギャラリーの手摺の修理ならびに内部塗装に関する工事稟議書が残されている。塗装は会堂内全面について行われたようである。

18　文化庁文化財部清永洋平氏のご教示による。

19　「東京都 重要文化財 慶応義塾三田演説館 保存修理工事清算書」（財団法人文化財建造物保存技術協会）、p. 3　本資料の存在は、同協会武藤正幸氏のご教示による。

20　「重要文化財 慶応義塾三田演説館 耐震補強工事」（基本設計：管財部工務課）

21　参照。猪又幹夫、「長命建築の長生きの工夫 演説会堂からセレモニーホールへ 慶應義塾三田演説館」、Re（No.112）、1998年３月、p. 27

22 「平成23年度 重要文化財 慶応義塾三田演説館保存修理（災害復旧）工事 設計図書」（公益財団法人 文化財建造物保存技術協会）
23 「平成26年度 重要文化財 慶応義塾三田演説館保存修理工事」（公益財団法人 文化財建造物保存技術協会）
24 吉澤政己、「幕末・明治期の紙張り天井」、西洋建築史研究会編『パラレル―建築史・西東―』（本の友社）、2003年、p. 214 ただし、昭和59年の修理というのは慶應義塾側にも文化庁にも記録はない。
25 「重要文化財 慶応義塾三田演説館 保存修理工事清算書」（前掲書）、p. 9
26 「重要文化財 慶応義塾三田演説館 保存修理工事清算書」（前掲書）、p. 3に「海鼠壁は移築時に一度張りかえられて、その際目地割りが変更されている。」とある。

図版出典

図１、４～10、22、26～31：筆者撮影
図２、３ 筆者作図
図11、14、15『慶應義塾五十年史』（前掲書）
図12『慶應義塾創立150年記念 未来をひらく福澤諭吉展』（前掲書）
図16『慶応義塾百年史 中巻（前）』、昭和35年、慶応義塾
図13、17～21、23～25、32：慶應義塾福沢研究センター提供

謝辞

本稿の執筆に際して、慶應義塾福沢研究センターならびに管財部からは演説館の実測調査の許可を得るとともに、図面を含む文献資料のご提供を得ることが出来ました。ここに記して感謝申し上げます。